

時事解説

◇昭和23年7月8日 第3種郵便物認可◇昭和53年1月24日 国鉄首都特別扱承認新聞紙第519号◇毎週2回火・金曜日発行(但し祝日を除く)◇発行所 東京都千代田区日比谷公園1番3号 時事通信社 電話(03)591-1111◇郵便番号100 〇時事通信社1979

時事通信

三度目の中国



去る六月十日から二十一日まで中国を訪問した。私にとっては三度目の訪中である。最初は一九六六年秋、まさに文化大革命が始まったばかりで、紅衛兵運動が猖獗(しょうけつ)をきわめていた。

二回目は一九七五年初頭、「批林批孔」運動の時期であったが、このときはモスクワ・ウランバートル・北京と単身で縦貫旅行し、外モンゴルから國境を越えて北京へ入った。今回は上海、西安、北京を訪れたが、「四人組」打倒以後の中国であり、北京では全国人民代表大会(第五次第二回)がちょうど開幕したときであった。過去十数年間の激動の中国の変化を直視してきた者として感慨ひとしおであったが、もとより、今回の旅行中には、かつて紅衛兵たちが手に手にかざしていた『毛主席語録』を一度も見ることがなかったし、毛沢東賛歌も完全に過去のものになってしまっていることを再確認できた。天安門広場の毛主席紀念堂も、もはや訪れる人は少ない。それにひきかえ、周恩来総理への慕情はいまも高潮を示しており、夜、ラジオに耳を傾け

ていると、「敬愛する周総理、あなたはいまどこにいますか……」との詩の朗読が切々と流れてくる。

中国では周知のように、いたるところで林彪、「四人組」の罪状が語られ、彼らによる破壊がいかに深刻であったかが強調されるのだが、問題は林彪、「四人組」のみならず、「プロレタリア文化大革命」そのものが中国社会をあらゆる分野において破壊し、中国にいかにも大きな損失を与えたかを彼らは語っていることがわかる。「プロ文革以前はそうではなかった」とか「プロ文革まではよかった」といった表現を何回も聞いたが、こうして「文化大革命」それ自身がいまや悪の代名詞になっているといつていいのである。従って、今日の中国では、政治や学術の領域のみならず、芸術や文化の各分野でも文革以前のものがすべて復活しつつあり、西安でみた四川古典喜劇などは、まさに王侯将相のドラマで、そこには社会主義の要素も革命性のひとかけらも見受けられなかった。

北京の「民主の壁」には壁新聞が相交わ

らず出ており、「劉少奇同志に想いをこぼせる」というものがひととき目立って、劉少奇の名誉回復も近いことを暗示している。一時、抑えられたとはいえず、反体制派の言論もまだ燃えつつ出ており、「北京の春」は第六号が出ていた。

結局、中国はいま大きな転換のなかにあって、状況はきわめて流動的ではあるが、いわゆる「四つの近代化」に直面して、旧幹部の大部・陳雲氏が復活したり、かつての北京の黒幕・彭真氏が今回も法制化運動のリーダーに返り咲いていることに見られるように、また、五〇年代前半に活躍した薄一波や薛暮橋などの経済専門家が脚光を浴びていることに見られるように、五五年後半の急激な農業集団化以降のプロセスが根本的に否定されようとしている。この過程こそ、毛沢東の指導によるものであったのだから、それは毛沢東の社会主義建設路線そのものの否定であることもはや明瞭(めいりょう)である。(中嶋謙雄)

主な内容

- 陰謀のにおいがした東京サミット……2
- なぜ一九八五年なのか
- 変わって来た先進国首脳会議……9
- 七月号の論壇から(鈴木幸寿)……11
- 久々に登場した経済学特集